

その八

嶺村 法子



幼稚園の生活の中で、何かを作っている時間は、結構な割合を占めるのではないかと思えます。ごっこ遊びで身につける剣や冠、お面などを始め、お金やチケット、食べ物や売り買いする品物など、子どもたちは実にこまごまといろいろなものを作っています。その他にも、ちよつとした時間に友達とおしゃべりしながら描く絵やら、紙芝居や絵本、ペーパーサートのように見せることを目的とした絵など、これまた実に様々な形態の絵が保育室のどこかで絶えず生まれています。

元々描いたり作ったりすることの好きな私は、「こんな素材はどうだろう?」「これを使えばもつと本物らしく見えるのでは?」と思いついたことをすぐに試したくなり、つい製作にのめり込んでしまうということがよくあります。その結果、保育室には、「いつか何かに使えそうなもの」がどんどんたまっていき、第二教材室などと呼ばれる始末…。

そんな中で子どもたちは、本来の用途ではない使い方や大人ではとうてい思いつかないような組み合わせ方を見出し、がらくたの山の中から世界にひとつの作品を作っていきます。そして私も、子どもたちのアイデアに刺激され、「いいこと思いついた!」と得意になったり、「ちよつとやってみない?」と提案したり、時には「これ、いいでしょ」と承認を求めたり。共に生活する大人として、私自身が作る楽しさ・描く楽しさを醸し出

◆◆◆◆ TO・MI・KARA ひろば ◆◆◆◆

していたいと思っています。

四歳の一年間

様々な素材に触れ

描いたり作ったり

売ったり買ったり

飾ったり身につけたりして

楽しんできた子どもたち

五歳になって

新しく

木ぎれと釘と金槌に出会った

梅雨時の保育室では

いつも誰かが

熱心に釘を打ち

その釘の間に

ビー玉を転がしたり



▲ハンドルとタイヤをつけて色をぬって完成間近。「早く乗りたいな」

トミカラひろば

糸を張り巡らしたりして

互いに見せ合う姿が見られるようになった

その日も

製作コーナーの木ぎれの前で

なにやら熱心に作っていたが

釘を打つ音が聞こえてこない

しばらくしてなつちゃん

大小二つの木ぎれを

セロハンテープでとめて持ってきた

小さい方の木ぎれには尻糸が付けてあり

糸を引っ張ると動く仕掛けになっていた

小さい木ぎれには顔が描いてあり

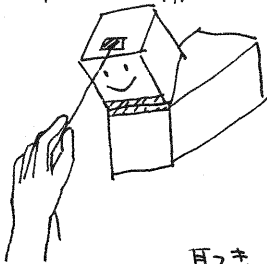
手のひらに乗るかわいい犬は

糸を引っ張ると

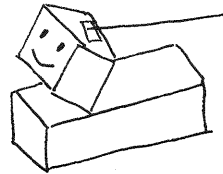
「わんわん」と

首を動かした

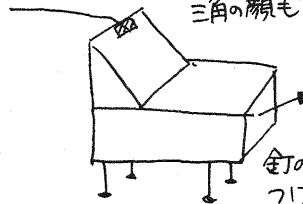
糸を引、張ると顔が前に動く



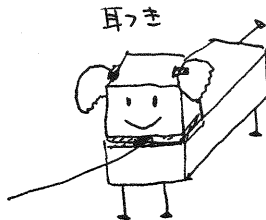
顔が上を向くものもある



三角の顔もある



金釘の足のいぼを
つけた犬



耳つき

「わあ、かわいい！」

私も糸を引っ張り

その単純な仕掛けの

思いがけない動きに目を奪われた

『「いないいないばあ」(註)でやってたの』

「あ、あたしも見た！」

それからあつという間に

犬作りが広まった

ももちゃんに

「足があるともっと犬らしくなるね」

と声をかける

(足、足、足……)

何で作れば木の犬にぴったり合うだろうか?)

「ねえ、釘を打って見たらどうかな？」

一緒にやってみる？」

小さな木ぎれに

釘の足が四本

五本目の釘はしっぽになった

すずちゃんは

私とももちゃんとのやりとりを見ていて

自分で釘を打つ

四本足でしっぽもある

でも首は

動かないようしつかりテープでとめてある

すずちゃんの尻糸は

犬を引っ張るロープの役目をしていて

友達への刺激を受けながら

すずちゃんはすずちゃんの考えで

自分の犬を作った

それがすずちゃんらしい

しばらくしてすずちゃんが

「先生、見て！」

と弾んだ声で園庭に下りてきた

すずちゃんの犬に

トミカラひろば

耳がついていた

小さな発泡スチロールの球を半分に割り

顔の両側に付けている

「これ、すずちゃんが考えたの？」

「そう！」

すずちゃんは

にこにこ満足そう

左右の耳の角度が微妙に違っていて

なんともかわいらしい

手で引きちぎった発泡スチロールの断面が

苦勞の後を物語る

体を振ると

本物の犬のように

びよこびよこ耳も動く

自己主張が強く

普段友達と

ぶつかり合うこともあるすずちゃんが



▲「ほら、こうやると首が動くんだよ」犬たち勢ぞろい。

友達からも認められて笑顔になった

えりちゃんは毛糸でしっぽを付けた

はっちゃんとありちゃんは

体にハートの模様を付けた

自分らしさのエッセンスを

ちよびり振りかけて

どの子も大事にその犬を連れて歩いた

「ねえ、かくれんぼしよ！」

と はっちゃんが言った

「いいよ」

と えりちゃん

「これがグーで、これがパーで、

これがチョキね」

尻糸を引っ張って首の角度を変え

犬ジャンケンが始まった

「1、2、3、4……もういいかい？」

絵の棚のカーテンをめくり

陰にそつと犬を隠す

「ねえ、ここマンションにしようよ」

「だめだよ、マンションなんて」

「おうち作ってあげようよ」

えりちゃんは小さなバックの中に布を敷き

犬を寝かせた

「続きは明日ね」

犬はそれぞれの引き出しやベッドの中で

眠りについた

昨日のテレビ番組から、保育室にあった木ぎれを応用することを思いついたなっちゃん。その思いつきから始まった遊びに他の子どもたちも私も引き込まれていった。

年長組の六月下旬。友達のことを認める

トミカラひろば

たり、真似したり、自分の遊びに取り入れたりと
できる関係が育ってきている。そして、ちよつと難
しいことに挑戦してみようとする意欲や、自分の
イメージを何とか実現していただくの技術も身に
付けてきた。

みんなの注目を集めるような大々的な遊びでは
ないけれど、保育室の片隅で練り広げられている
ことの中に年長組らしい育ちが見えるひとときで
ある。

(中央区月島第一幼稚園)

註 NHKのテレビ番組。積み木で動物を作っていた
のを見たとのこと。



▲「さいしょはグ、ジャンケンポン」「勝った!」「かくれるよ!」